

横井小楠

—その業績と生涯—

小楠の2歳上の兄・時明が、安政元年(1854)7月、病死しました。享年48歳の若さでした。小楠は、その前年2月、肥後藩士小川吉十郎の娘・ひさと結婚するなど、祝い事がありましたが、人一倍慕っていた兄の死に悲嘆に暮れました。兄はかねてから病弱であったらしく、度々職を辞しています。小楠の、兄への看病ぶりは至れり尽くせりで、門弟たちを感動させたといいますが、一時は病状の回復した兄も、ついに帰らぬ人となってしまったのです。

9 小楠の家督相続と絶交

横井家では時明の死去にともない、跡継ぎが問題になりました。時明には長男・左平太(10歳)がいましたが、幼少でしたので跡継ぎをすることができません。そこで小楠が兄の養子となって、横井家を継ぐことになりました。

ところで、当時の肥後藩では家禄を代々受け継ぐ世襲に制限を定め、知行取^{*}は旧知と新知とに分けられていきました。

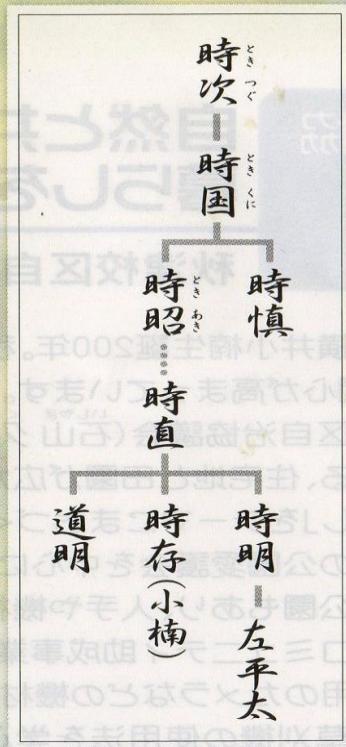
この制度は、第8代藩主細川重賢の時にできたもので、家禄を相続する場合、第4代藩主光尚まで(1649年)の家臣は旧知としてすべての相続を認めるが、それ以後に家臣になった者は新知とし、親(小楠の場合は兄)の手柄と跡継ぎをする者の才能が特に優れていないと家禄を減らすというものです。小楠の家系は新知でした。

小楠は文武両道にたけていましたが、肥後藩政の改革などを求めた実学党のリーダーということで、家禄が減らされる心配もありました。幸いそのまま相続でき、小楠はさっそく肥後藩士として番方(軍事訓練や藩主の守衛など)に任じられました。

さてこのころ、小楠は米田是容と絶交しています。小楠と4歳年下の米田が親しくなったのは藩校時習館で学んでいたころです。米田

肥後横井家略系図▶

細川忠利(近世細川氏^{**}第3代)
が、寛永9年(1632)、肥後国54万石領主として熊本城に入城した際、細川氏の家臣であった横井時次も肥後に入国し、肥後横井家の祖となりました。宝永4年(1707)、2代目時国の子時昭のとき分家し、家禄150石を賜りました。この時昭が横井小楠家の祖です。



は1万5千石の国家老であったのに対し、小楠の横井家はわずか150石で、地位と境遇に大変差がありました。しかし、二人は、お互いの学問の深さと優れた考え方を尊重し合い、20年以上親しい交際が続いていました。ところが、学問の目標についての解釈の違いなどが原因で絶交し、実学党も米田派と横井派に分かれてしまいました。

*知行取 … 江戸時代、領主から一定の土地(知行地)を分け与えられた上級・中級家臣。横井小楠家も中級家臣であった。

**近世細川氏 … 戦国時代から江戸時代までの細川氏のこと。